

7 小島宝素の『医心方』卷二十二
の伝鈔について

町 泉寿郎

小島宝素の天保十三年の京都訪書記録『河清寓記』に、『医心方』の記事は五箇所見えている。

(1) 医心方 卷廿二 丹波康頼真跡 (8ウ)

(2) 医心方 卷廿二 岡本越中守 半井伝来本 (12オ)

(3) 天保壬寅十月廿四日 於仁和寺御室賜拝覧

○ 医心方 (17オ)

(3) 錦小路家ニ所蔵之医書目録

○ 医心方 (43オ)

(5) 医心方 廿二 古本二通

錦小路 畑柳平

宝素はまた「医心方伝来書」(「医心方提要」所収)なる文章を残しており、次のような一節がある。

医心方第廿二一巻、伝云、康頼真蹟ナリト、別ニ副

本アリ、コレモ二百年前ニ古巻ヲ影写セシモノナリ、

加茂岡本氏ニ、先祖從五位上保晃カ通仙院ヨリ得タ

ルモノナリト云テ、其家ニ秘惜スル事年久シト雖モ、

一旦衰微セル事アリテ、良価ヲ求テ沽却セル事ニナ

リ、又平安畑成文、コレヲ錦小路家ニススメテ購求

セシメ、副本ヲハ己ノ家ニ購蔵セリ、壬寅冬月、余

コレヲ借帰スル事ヲ得タリ、又原巻ヲ見事錦小路家

ニ乞シニ、成文カ家ニ携来ラレシ折節ニ邂逅シテ、

親観手展スル事ヲ得タリ、

両記事を併せ考えれば、宝素がこの時、閲覧した『医

心方』は次のように整理できる。

(イ) 古鈔『医心方』卷二十二 伝丹波康頼筆、半井氏伝来

——岡本氏旧蔵——当時錦小路氏蔵——成實堂文庫現

蔵

(ロ) 重鈔『医心方』卷二十二 十七世紀前半写、半井氏伝

来——岡本氏旧蔵——当時畑柳平成文所蔵

(ハ) 仁和寺伝存本(現存五巻、江戸後期当時二十二包十七巻伝

存)

錦小路氏所蔵本については、十月一日付の多紀元堅宛

宝素書簡に「錦小路目錦／医心方足本」（日本大学医学部図書館所蔵）と見え、入洛早々から伝聞していたことがわかる。(1)はそうした伝聞段階での書き留めであろう。

畑柳平成文所蔵の重鈔本巻二十二は、(2)のことである。宝素が畑氏を初訪問したのは十月十日から十二日の間と推定できるので、その時に実見したものであろう。さらに十月十五日付の元堅宛宝素書簡に「医心方も廿二一軸永観古本一見出来申すべく候様子に「ござ候」とあるから、この畑氏訪問時に畑氏に謀って錦小路氏所蔵古鈔本の閲覧許可を取りつけ、十月十五日から余り遠くないころに実見したと考えられる。畑氏は古鈔本売買を岡本氏から錦小路に仲介しており、その縁故により宝素の閲覧希望に便宜を与えられたものと思われる。

畑氏所蔵本は、天保当時より二百年ほど前、十七世紀前半ごろの写本で、半井家に伝来した、同家伝来の古鈔本の副本である。後に古鈔原本巻二十二とともに岡本家に流出し、さらに近年、畑氏の仲介により古鈔本は錦小路氏に、副本は畑氏に移っていたのである。宝素は錦小路氏所蔵古鈔本は、畑氏のもとに錦小路氏が同書を携行

した時に、暫時閲覧したのみで、借鈔を許されなかった。畑氏所蔵の副本は借り出して江戸に持ち帰り、鈔写ののちに返却した。

恐らくこの時に鈔写されたものが杏雨書屋現蔵の「医心方残一卷(杏4626)」であろう。杉立義一氏は該写本を多紀本からの転写本とする一方で、錦小路家本からの宝素写本を散佚したものとしている(『医心方の伝来』30頁・32頁)。小曾戸洋の『中国医学古典と日本』でも、小島宝素影写の巻二十二は現存しない(570頁)とされている。しかしここには再検討の余地が残されている。本発表を行うゆえんである。

(北里研究所・東洋医学総合研究所医史学研究所)